

文部時報

第八百二十八號

聯合軍の進駐と國語整理の急務 保科孝一 (東京文理大學名譽教授).....	一
教育に必要な討論法 兒玉九十 (明星中學校長).....	六
討論法について 勝田守一 (文部省圖書監修官).....	一〇
暫定國語教材の解説 石森延男 (文部省圖書監修官).....	一五
文化再建について 今日出海 (文部省事務官).....	一九
米英の公民教育 伊藤良二 (文部省調査課長).....	二三
——公民教育に関する調査——	
文部日誌.....	表紙第二面
通牒.....	七二
三月法令告示.....	三三

文 部 省

文化再建について

今日 日出海

今は文化園として伸びて行く道のみ残されてゐるのだが、實情は文化どころか、その日の糧が満足に口に入るかどうかといふ土壇場に来てゐる、電車の中や往來で人々の服装を見てみると、戦後の風俗派と論じるとした風體である。誰も好き好んでぼろ服を穿ひ、破れ靴を穿いてゐる者は居るまい。實際にないのだ。そして補給も出來ぬのだ。この慘澹たる敗戦の跡に文化の芽が、最早ちつとして順番を待つてゐられずに芽生えてゐるのを見逃してはならぬ。

丁度雪の下にもう可愛い青い芽が、春近くなれば芽生えてゐると同じやうだ。この可憐な芽の持つ強大な生命力に驚くべきである。

戦争中は不急不用の文化は蔑ろにされた。先づ飛行機、大砲、砲丸だ、といつては文化は後廻しにされた。そして無理解で横暴な軍人や官吏の手で蹂躪され続けた。

戦後ともなれば文化園日本建設と口々に言はれながら、文化はまた後廻しにされさうだ。

戦争の敗因があらゆる方面から究明されてゐるやうだが、結局文化の低さに大きな理由があることは一様に認められてゐる。それでゐて文化を高めようと努力せぬのはどういふわけであらう。

文化を高めるための諸施策を議する政治家が文化を持たぬ政治屋にすぎなかつたともいへる。また所謂文化人が文化を高めるために政治の中樞に参画出来る政治力を持つてゐなかつたともいへる。

戦時中殆んど暴力にも等しい無理解な連中の腕にかゝつて文化は折り曲げられ、變質した事實は否定出來ぬ。この暴力に抵抗したものは災厄を蒙り、服従したものは奴隷に落ちてしまつた。文化はいぢけても、やしのやうに瘦せこけた。然し一度衰弱した文化自由は復活した。然し一度衰弱した文化

はなほ病後のひ弱さを恢復してゐない。尤も食糧はない、住宅も乏しい。そしてどうしたらもう少し食べられ、家が建つかといふ見送しがなく、未だ焼けトマンの接合で寒さに震へてゐる人があんなに多くては、一體文化の復興を叫ぶ人は何を食べ、何處に住んでゐるのだらうと逆に質問されるだらう。

吹きッ曝しの往來で、背中を丸めて蜜柑やら南京豆を賣つてゐる爺さんや婆さんの表情をとりくり観察するがよい。何んと動かぬ表情だらう。じつと一點を凝視したきり瞬きもしない。織るやうな電車自動車往き交ひ、人々の忙しげな足並……そんなものに全く無關心な冷たい眼差。無論ひどい間値で、稀にひやかし客が「爺さん恐ろしく高いね」と値切りにかゝつても、彼の表情は變らない。何んて頑な爺さんだ。

人々の心は斯く閉ざされてゐる。慾念が凝結してしまつてゐる。これを解きほぐすことも文化の仕事なのだ。文化を高い雲の上に置いた人は誰か。文化を踏み踰つた俗吏も悪いが、また人々の手の届かぬところに上げて、文化を孤立させてしまつた者も罪なしとしない。

文化が孤立したのは、文化が専門化したきたからだ、だから人々は文化の享受を知識の修得と心得るやうになつた。文化をまるで勉強のやうに硬苦しく學びとらうとする。斯うして學びとつた知識は教養として消化されるであらうか。脳髓の何處かに薄く記憶の形で残つてあふとも、決して血となり肉となつて人々を教養人として仕上げはしないであらう。

矢鱈に勳章をぶら下げた軍人を羨ましいと思ふのは子供が無知な人間と決つてゐる。知識のかけらを一杯頭にだけ詰め込んだ人間を學者と呼び碩學と呼ぶのは、呼ぶ方が無知だからだ。

戦争中小さくも機構よりも大事なものは人間だといふ言葉を度々耳にした。そしてその人間が居らぬと歎息する聲も聞いた。だが私は言ひたい、人間を見抜く眼を持つた人が上の方にあるたらうか。少くとも人間を見抜くにはさうした修練が必要だ。人間が見抜くといふところから、人間の肩書を信用するやうになつた。官等をつけたり、階級をつけて人間を種別化する。そして官等が上るためには過失なきやうに只管努力するために人間味が失せて消極的な

保身術に終始する。何處の社會にも出世主義が横行し、特權階級益々跋扈する。

東條大將の悲劇は人間の魅力も英雄的要素もなく、只肩書に自己陶醉したところにありはしなかつたか。否東條首相のみならず軍人官吏の肩書と特權に安易な自己満足してゐた手合がどんなに多かつたことか：文化政策が喧傳されたが一體どんな政策があつたらう。情報局が設けられ、陸海報道部があつて唯文化人を束縛し、恐喝したやうではなかつたか。幼稚な國策宣傳があり、宣傳に踊らぬものを縛り上げたに過ぎぬではないか。憲兵と特高が徒らに帽を利かし、誰彼を疑ひ深い眼で睨んでゐる。そのため庶民は萎縮して、心にもない駭めしい言葉を吐き散らし、大言壯語の惡習が天下に瀾漫したものだ。誰も彼も指導者面をして、説教と訓辭ばかりに専念した。一體誰が叱られ、戒められてゐたのだらう。

一庶民が下ると、指導者や議員は必ずその詔勅の言葉をそのまゝ、使つて國民に説教する。堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……天皇制護持論者の閉鎖、無能……戰時中位言葉が輕蔑されてゐたことはいふまでもない。言葉

が空虚に發音されてゐたといふことだ。といふことは文化が輕蔑されてゐたといふ意味にもなる。度々情報局長奥村某のラヂオ放送を聞き乍ら、私は言葉の空しさをづくづく感じた。こんな無内容な應援團長の演説で文化が右を向いたり、左を向いたりする味氣なきを文化人は憂鬱な顔をして忍んでゐた。奥村某は當時の悲しき道化者に過ぎなかつたが、また當時の所謂指導者達の象徴でもあつた。

文化がこのやうな道化者に支配され、弄されたことは、文化を低く見る習慣を生んだ。私は昨年度々議會に足を運んだが、文化問題が政治家の間に眞面目に論議されたことがなかつたのに驚いた。先にも述べた如く、文化人が政治家に居らぬといふ事情に困るが、また文化人が政治に無關心であることにも起因する、何れにせよ文化は國家の重要な問題とならぬことに違ひない。だが、一切の軍備を永久に拋棄することを憲法に規定しようとしてゐる日本が、文化國家として再起するより他に道なき現在、事實は文化を拋棄してゐるのと一般であつて何の政治があらうか。勿論食糧問題、住宅問題をよそに文化國

家建設もあるまいが、文化を専門化し、特殊扱ひにするから、後廻しにしたり、等閑視したりするので、衣食住の問題には文化は不要と心得るところに誤謬があるのだと思ふ。

文化が我々の生活の中に溶解し、消化されること、文化の浸透普及であつて、文化の水準が低いといふことは文化が生活に浸潤してゐないことを意味するのである。つまり特殊な文化人の専有物にすぎないからで、萬人の文化といふか、文化の共有が完全に行はれなければ、文化國家の具現は望まれぬ。文化を高め、深めることは特殊な才能を持つた文化人の働きを俟たなければならぬが、これを享受するものは國民一般である筈だ。この意味に於て文化の解放が改めて叫ばれねばならぬのだ。

譬へば美術史を假に繕いても、そこにはあらゆる時代に様々の天才が出現し、美術の傳統を強固にし、高め深めた事實を知る、然し一般庶民はどのやうに美術を享受し、生活の中に取り入れてゐたかを知る必要がある。宮殿建築の障屏畫までには數奇を凝らした造園術等のみならず、民藝の單なる實用品がどのやうに日本人の美術的教養を含め

て奥床しさを具現したか知るべきである。

戰争前の百貨店で廉賣した實用品の商業主義、便利主義に晒された蕪雜粗笨な姿はまことに痛ましい。茶碗にしる、皿小鉢にしる、丹念な職人の息吹杯は感じられず、薄利多賣を旨とした機械主義の殘滓としか受取れぬ。このやうな蕪雜な器を使用する乾燥無味な生活までが想像され、世に潤ひといふか奥床しさを消えてなくなつたかと歎じざるを得なかつた。

生活が荒んだ末に殺伐な戰争が勃發した。ここに私は微妙な因果關係があるやうに思はれてならぬのだが……

私は文化を専門化したり、生活から孤立せしめ、觀念的に取扱ふ弊風を一掃すること、文化を浸透せしめる第一段階だと思ふ。文化だけを抽出してこれを高めやうとしたり、これを無理押しつけに普及させやうとするのは文化を孤立させる基である。文化を専門化したために文化人は片輪になつてしまつたのだ。音楽には異常な才を持つが他のことにかけては無知であつたり、荒んだ生活を營む専門家が何人も多いたことか。美術の知識は他の追隨を許さぬ人が、生活を美しくする努力は一切拂はぬ

といつた例も亦少しとしない。

文化は觀念的にどんなに敬意を拂はれても、これを愛し、文化なき生活を嫌惡する庶民の感情にまで浸潤しなければ、文化國家建設をどんなに四角張つて叫んでも何もしらぬ。

食ふに食なく、着るに衣なき状態に國民を放置して文化はあり得ない。どちらを先にするかといふ問題ではなく、文化は常に生活問題や政治問題社會問題……あらゆる問題の中に溶解し、瀾漫し、空氣の如く存在する。映畫を一月見なかつたから文化に一月接しなかつたといふことにはならぬ。生活の中に、考へ方の中に、あらゆるところに文化的なゆとりが必ずなければならぬのだ。政治家が文化人でなかつたといふことは、即ち政治そのものの貧困を意味するのである。従つて政治や經濟の再建に努力を拂はねばならぬ今日、文化を後廻しにするといつた考へ方で、政治や經濟の眞の再建は覺えない。政治經濟の再建と同時に同様の努力を文化の再建に注ぐべきである、とを私は主張したのである。

お知らせ

今般文部時報は昭和二十一年一月終戦再建號として更生出發することになり、定價は一部(特別行爲税を含む)に變更されました。御諒承願ひます。別に送料も申受けました。

- 一 文部時報の形式及内容等總てが再建願ひの使命に適應致します。
- 一 文部時報の形式は每號約三十二頁、9本の把持し、民主主義的新日本文藝建設報導の使命に適應致します。
- 一 文部時報の形式は每號約三十二頁、9本の把持し、民主主義的新日本文藝建設報導の使命に適應致します。
- 一 文部時報の形式は每號約三十二頁、9本の把持し、民主主義的新日本文藝建設報導の使命に適應致します。

文部時報第八百二十七號(昭和二十一年四月)目次概要
米國教育使節團に對する挨拶……安倍文部大臣
教育行政官及教育者の性格
其の他政治教育について……田中學校教育局長
米國教育使節團を迎へて……澤登都立五中校長
政治と教育……河野都立八中教諭
フオーラム、文部日誌、文部省分課規程中改正
通牒、二、三月告示事項

文部時報刊行計畫摘要

- 一 目的 本省所管の教育學藝及宗教に就ての法令並に諸般の施設事項に就きて指示し周知せしむると共に所管の行政及教育機關等の聯絡提携を圖り民主主義的平和新日本教育文化の促進向上に役立たしむ
- 二 内容 本時報登載事項の概要左の如し
昭聲・勸語・法律・勸令・省令・訓令・告示・告諭・訓示・指令(例規となるもの)に對する指示・通牒・例規となるもの(一般の參考となるもの)・法令解説・質疑應答(本省より公文にて回答したるもの)復命書及報告書・講演・講話・談話・研究調査・統計等
- 三 編纂 文部時報編纂の爲編纂委員長並編纂委員若干名を擇く。編纂委員長は文部課長を以て之に充て、編纂委員は文部課員中より之を命ず。必要あるときは省内法令審査委員の意見も求むることあるべし。
- 四 發行 本時報は規格外五番、每號約三十二頁、定價金貳圓を標準とし毎月一回十日を發行期日とす但し本號は五月二十五日發行とす。

定價表

一部	金貳圓	郵税は別に 載きます
六ヶ月	金拾貳圓	
一ケ年	金貳拾四圓	

●臨時増大號發行の節は別に代金申受け
●御注文は總て前金に願ひます前金切れ
●の場合には送本いたしません

廣告料は二分ノ一頁九拾圓以下、四分ノ一頁六拾圓以下とす。掲載頁數は壹部毎右に拾五頁を超ゆることを得ず、文部省の御指定に依つたものとす

無差斷

發行所 東京都立川市曙町三ノ五五
印刷者 大谷保
印刷所 行政學會印刷所
東京都立川市曙町三ノ五五
電話 銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番
振替貯金口座東京 十三番
東京都田原坂路四ノ九

發行所 東京都京橋區銀座西七丁目一番地
帝國地方行政學會
電話 銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番
振替貯金口座東京 十三番
東京都田原坂路四ノ九
配給元 日本出版配給株式會社
會員番號一一九〇〇七